

インドネシアにおける最近の仏教

前 田 恵 學

目 次

- 一、まえがき——イスラム教下における仏教
- 二、インドネシアの比丘僧伽
- 三、在家仏教者の組織
- 四、インドネシアの寺院——*vihāra* と *ceṭiya*——
- 五、結び

一、まえがき——イスラム教下における仏教

インドネシアは現在イスラム教を基本とする回教国である。しかしかつては Borobudur に象徴されるように、Hinduism-Buddhism の伝統が栄えていた。Borobudur の遺跡を訪ねた人が、周囲一帯にひろがる田園の美しさもさることながら、そこに働く人々が、Hinduism-Buddhism と全く無縁になつていると考えて、今昔の思いに歎息する人は少なくない。しかし実際は、新しい芽が萌え出そうとしているようである。こうした実状については、今までほとんど調査せられたことがない。

インドネシアにおける最近の仏教（前 田）

筆者は、一九四九年一月より五〇年二月にわたつて、ジャワ・バリ・スマトラを中心に、インドネシアの學術調査に従事する機会をもつた。これは名古屋のアジア・エートス研究会（代表池田長三郎教授）のメンバー三名を中心に行なつたもので、岐阜市立女子短大戸谷修教授（社会学）、愛知教育大（現、神戸大）布川清司助教授（倫理学）との共同調査であった。文部省の科学研究費（海外學術調査）によるものであるが、必ず調査ヴィザを取得した上で出かけて欲しいとの要請があり、手続きが予想以上に手間どることとなつた。その間の事情は、アジア調査会『アジア時報』（一九七五年八月）誌上に詳しく報告しておいたので参照されたい。

今回の調査の目的は、アジアにおける諸地域のエートスを問題とするものであり、必ずしも直接に仏教を目ざすものではなくつた。筆者としては、極力仏教関係の資料を集める努力をしたが、調査期間その他多くの制約があつて、必ずしも完全を期することはできなかった。この報告は、今後さらに

完全な調査をするための一指標にすぎない。

インドネシアにおける仏教は、凡そ三要素から成る。第一は、古いHinduism-Buddhismの名残り⁽¹⁾、バリ島のpedanda Bodaが伝えつゝいる。第二は、華人たちの中国系仏教である。第三はTheravāda系仏教であるが、最近では第二と第三とが一つにまとまつて、インドネシア新仏教を形成しつつある。これを紹介するのが本稿の主題であるが、その前にインドネシアの宗教に関する特殊事情について言及しておきたい。

インドネシアの憲法第二九条第一項は、“The State shall be based upon Belief in One, Supreme God.”と規定している。この‘One, Supreme God’がイスラム教のフッラーの神を意味することは明らかである。最初の草案には、はつきりとフッラーとされていたが、それでは他の宗教が認められなくなるので、字句が柔らげられたという。従つて同条第二項には、“The State shall guarantee freedom to every resident to adhere to his respect religion and to perform his religious duties in conformity with that religion and that faith.”と述べて、一応は宗教の自由を認めた形をとっている。しかしイスラムを基本とし、One, Supreme Godにするべきことを規定した第一項の存在は、他の宗教に対して厳しくその対応を迫るものがある。キリスト教やヒンドゥ教では、それぞれ三位一体の解釈などを通じて、この憲法の規定との会通を計

っている。仏教ではSang Hyang Adi Buddha（本祖仏）の創唱が見られる。仏教最高の仏として本祖仏を立て、これがOne, Supreme Godにはかならずとすべきのである。この仏は釈迦仏とは異なる法身仏である⁽²⁾。

宗教に関する政府の最高機関としては、宗教省⁽³⁾（Departemen Agama : Department of Religious Affairs）がある。日本の文部省にあたる教育文化省とは別に独立した位置を占めている。宗教大臣（Minister）の下に次官（Secr. General）と、宗教別の五つの部局があつて長官がおかれる。

- (1) Dir. General of Islamic Affairs. (2) Dir. General of Catholic Affairs. (3) Dir. General of Protestant Affairs.
- (4) Dir. General of Hindu/Buddha Affairs. (5) Dir. General of Hadji Affairs.

これによつて、キリスト教やHinduism-Buddhismにも一応配慮せられてゐることを知る。

インドネシアにおいては、他のイスラム教国と同様に、宗教は国家と不可分の関係にある。国家は宗教に補助金も出すのである。イスラム教に対する援助がとび抜けて多いことはもちろんであるが、プロテスタントやカトリックに対しても、バイブルの出版援助などをしてゐる。Hinduism-Buddhismに対しても援助を行なつてゐるが、出版関係としては次の如くである（一九七四年⁽⁴⁾）。

- 一' Dhammapada (Budha) 一二、五〇〇
 一' Saranamuccaya (Hindu) 六、六一二
 三' Veda Parikrama (Hindu) 六、二〇〇
 四' Sang Hyang Kanahayanikan (Budha) 四、五〇〇
 五' Manawa Dharma Sastra (Hindu) 四、六〇〇

計 三五、四一二(単位 buah)

インドネシアでは、すべての国民が、いずれか一つの宗教に所属すべきことが奨励せられる。宗教をもたない人間は、共產主義者と見做されても仕方がない。インドネシアにおいて共產主義者と烙印を押されることが何を意味するか、一九六五年の大弾圧を見れば明らかである。イスラム教国であるから、イスラム以外の宗教は不利な立場に置かれているが、しかしいずれかの宗教に所属していれば、一応は信教の自由も認められ、それなりに安全の保障があると言つてよい。こうした政治状況の下で、仏教への入信者が増加するとも、仏教徒の組織化がすすめられたと思われる。

二、インドネシアの比丘僧伽

インドネシアには、早くから多数の中国人が移住しており、華人社会には中国式寺院があり、中国本土から来住した比丘僧がいた。しかるに最近には中国人僧侶が次第に減少し、地許で出家得度して、比丘僧になる手段もない。一九六九年(B・E・二五・一三年)には、全インドネシアで中国人比丘僧は、わ

ずか二〇名ほどとなつたと報告されている。⁽³⁾ このことが、最近インドネシアの華人社会において、Theravādaの比丘が歓迎される一つの理由となつている。かつまた、古い年齢層には大乘がなお受容されているが、若い年齢層はむしろTheravāda 仏教に親近感をもつものが多くなつた。これは東南アジアの仏教国(スリ・ランカーなど)からの布教活動や、国際関係の深まりと、無関係ではないであろう。こうした中で行なわれた、タイ比丘による Borobudur における upasampada と、インドネシア比丘僧伽の設立の意味は少なくない。

一九六九年タイ比丘 Phra Sasana Sobhana 師は二人の比丘(Phra Dhammivema Sobhana 師、Phra Khanitipala 師)と二人の upasaka を同伴して、インドネシアに赴いた。その目的は、*"So our party had been invited to Indonesia to accomplish the upasampada of five new bhikkhus as there was no sangha of bhikkhus who could give upasampada resident in the country."*⁽⁴⁾ と言われる。つまり、インドネシアに受戒を与えうる比丘僧伽が存在しなかつたから、五人の新比丘の受戒を成就せしめるために、招待されたのであつた。この時の記録は、同行した青眼の比丘 Khanitipala 師によつて公開された。

インドネシアに Theravāda 仏教が伝えられたのは、これをはじめではない。すでに個々には伝道が行なわれて、例え

ば、スリ・ランカー Vajrāṇa の Narada 長老などが訪れていることは、筆者も聞いていた。インドネシア人で、海外で受戒した人もある。しかし比丘僧伽設立までにはいかなかったであろう。タイ比丘の援助を得て、ついに比丘僧伽が設立できた理由について、次のように言われている。

“Thai Bhikkhus would be more successful as Dharmadutas in Indonesia than bhikkhus from Ceylon, giving as reason the fact that Thais are more adaptable and not so rigid and especially that they are not so fiercely anti-theistic as are many from Ceylon.”⁽⁵⁾

ここでは、タイ比丘の成功を喜ぶと共に、その理由を、セイロン比丘よりも適応性があり、反神論的でない点に求めている。セイロン仏教には、キリスト教との激しい対立抗争の歴史があり、タイ国にはそれが無いことを言うのである。イスラム教の下で、妥協しながらやつていかねばならぬインドネシアの仏教の状況を反映している。しかし先行する比丘たちの活動があつたから、タイ比丘の僧伽設立も、成功することができたのであるし、またわずか三名の比丘を送るだけで、事足りたのである。⁽⁶⁾

インドネシア比丘僧伽に所属する比丘の数は、現在二〇数名⁽⁷⁾で、沙弥まで含めると八〇名ほどになるといふ。これを支える在家信者の数は多く、組織化も進んでいるので、今後の

発展が期待せられる。比丘僧伽の本部は、Bogor に近い Pacet (Pacét), Cipanas (Tjipanas) の Vihāra Nāgasena にある。Chief Priest ʔ Ashin Jinarakkhita 長老は、Chinese Indonesian である。一九五三年頃、ビルマで受戒し、帰国してから比丘僧伽の確立と、在家者組織の形成に努力して、人々から尊敬せられている。

三、在家仏教者の組織

出家比丘の数に比して、在家者の数は思いのほか多い。範囲もジャワ・スマトラ・バリ等にわたっている。すぐれた指導者もいて、組織化もすすんでいる。イスラム教に僧侶がないことを目の前に見ているので、在家者だけの組織も、比較的容易に結成できるかと思われる。

在家者中指導的役割を果たすのは、一般に pandita と呼ばれる人々たちである。かれらは八戒などの戒律を守り、教団の運営や儀式の執行にあたり、比丘僧がいなくても支障のないように努めている。信者は男は upasaka、女は upasika と呼ばれているが、合して Persaudaraan Upasaka-Upasika Indonesia (P. U. U. I.) という組織名も見られる。

インドネシアを代表する在家者の組織体は、「インドネシア仏教会」(PERBUDDHI=Perhimpunan Buddhis Indonesia: Indonesia Buddhist Association) と呼ばれ、かつては Soemantri Moh. Saleh 将軍が議長 (ketua) をしていた(一九六六年頃)。この人

は現代インドネシア最初の仏教徒と言われる。最近この組織は Buddha Dharma Indonesia (Buddhi) と呼ばれ、President Director となつて活躍してゐるのは、Suraji Ariakertawijaya 將軍である。Suraji 將軍は Soemantri 將軍の後輩で、その影響を受けて仏教に入信した人。一般に権力集中性の強いインドネシア社会にあつて、仏教会も例外ではなく、最近は何事も Suraji 將軍を中心として事が運ばれてゐるやうである。インドネシア仏教会は、上にインドネシア比丘僧伽をいたたき、全国的な仏教徒の組織を形成して、広範な活動を行なつてゐるやうに思われる。

一九七三年十二月、インドネシア独立後最初の宗教省と仏教界幹部の会合が行なわれた。⁽¹²⁾ 全国から仏教の pandita や教師 (guru) が、六五名ほど Cipanas に集會した。かれらは Jambi, Lampung (以下バタヴィヤ)、Jakarta, Tangerang, Bogor, Sukabumi, Garut, Bandung (西部ジャワ)、Rembang, Pati, Kudus, Purworejo, Semarang (中部ジャワ) の諸地域から集まつた。また一九七四年、南スマトラの Telukbetung において主として南スマトラの代表者たちを集めて行なわれた。同年、中部ジャワ Kudus におつても会合が行なわれたが、この時、Rembang, Pati, Jepara, Kudus, Blera, Semarang, Salatiga, Ambarawa, Yogyakarta, Wonogiri (中部ジャワ)、Surabaya (東部ジャワ) など、Menado (北バンスン) から集ま

つたという。ここに見られる地名によって、インドネシアで仏教が行なわれている地域について凡その概念を得ることができよう。

因みに、Palemban, Jambi, Bengkulu, Padang などのスマトラ各地には華人仏教徒が多く、南スマトラの Lampung, Tanjungkarang にはインドネシア人仏教徒が多い。ジャワは仏教徒の最も多い地域であるが、Jakarta, Bogor, Bandung, Sukabumi, Garut, Karawang, Tangerang, Semarang, Salatiga, Yogyakarta, Surabaya, Malang, Blihar, Muntian などには華人仏教徒、インドネシア人仏教徒のいずれも多い。その他の地域としては、Bali, Lombok のほか、Banjar Maseu, Samarinda (Kalimantan)、Munat, Makassar (Sulawesi) などがあげられる。

Yogyakarta は Borobudur に近く、その周辺にはインドネシア仏教会の傘下にある大きな支部がある。その支部長は Drs. Rustanto だ。Yogyakarta の市役所に勤めつゝながら、事実上の実力者はその母堂であり、前支部長の Ibu R. S. Prawirokesomo S. H. である。夫人の主催する支部のメンバーは、華人一〇数万人と、Yogyakarta 近郊の農村地帯で、Temanggung や Magelang などの諸郡 (kabupaten) にわたる凡そ五万人ほどのジャワ人仏教徒が含まれる。Semarang や Salatiga にも約七万に上るジャワ人仏教徒がおり、やは

り夫人の影響下に置かれている。また Yogyakarta 周辺の農村には、約二万の無組織の仏教徒がいるという。最近この方面で仏教徒が増加していると言われるが、一九七〇—七一年の国勢調査では、インドネシア全体でも仏教徒の数は二四二、八六七名しかないことになっているので、夫人の傘下において、かなり急激に増加したことになるのであろう。

四、インドネシアの寺院——*vihāra* と *ceṭiya*——

インドネシアには、従来からある中国式寺院のほかに、Theravāda 仏教を受容して出来た *vihāra* ないし *ceṭiya* がある。一九六九年には Jakarta に次の一 *vihāra* と七 *ceṭiyas* があつたという。

- (1) *Vihāra Dharmayuga* (2) *Cetiya Prajñāpāda* (3) *Cetiya Vartuḥdaya* (4) *Cetiya Karuṇāpāda* (5) *Cetiya Mettāpāda* (6) *Cetiya Sasarāpāda* (7) *Cetiya Jayaloka* (8) *Cetiya Ariyaloka*

これらは週一回もしくは *uposatha* の日に会合を催し、仏教伝道の拠点となつてゐる。

vihāra と *ceṭiya* の区別は、それほど厳密でないうであるが、*ceṭiya* は篤志家が個人で建てているもの、*vihāra* は多くの人が協力して建設した公共的なもの、という違いがあるようである。

筆者は一九六九年版『仏教大年鑑』の住所録を頼りに、

Cetiya Prajñāpāda を尋ねてみた。同年鑑によれば、ここに Indonesia Buddhist Association があり、また WFB Regional Center があることになっているからであつた。ところがここは Soemantri 將軍の自宅であり、横に小仏堂(間口約五米、奥行七米位、ウォリンド付平屋)があつて、*'Cetiya Prajñāpāda'* と名づけられてゐた。そして Indonesia Buddhist Association の仕事も WFB の仕事も、今はすべてに Suraji 將軍の手に移つてゐた。この *Cetiya* には、Borobudur のタイ比丘から受戒した一人 Uggadhamma 師 (Chinese Indonesian) が滞在していた。いく人かの人が集まつており、中には Medan の仏教会が活躍してゐる Dr. Law Djoe Kim (劉如欽) も来てゐた。Uggadhamma 師は平素は Semarang にゐることが多いが、時々各地の *vihāra* や *ceṭiya* を巡回するのだから、Uggadhamma 師の Semarang の寺は *Vihāra Mahabodhi* であつて、Semarang では他に *Vihāra Budi* の名が知られる。

一九六九年タイ比丘の一行は、当時のインドネシアの仏教活動の中心は Bandung の *Vihāra Vimaladharmā* にあると伝えつゝる⁽⁹⁾。Bandung では他に *Vihāra Samudrabhakti* の名が知られてゐる。しかし最近では、小なぐとも比丘僧伽の本部は Bogor に近い Pacet にある。インドネシア比丘僧伽の Chief Bhikkhu である A. Jinarakkhita 長老がそこに住すからである。Pacet では、*Vihāra Nagasena*, *Vihāra Sakya*

Vanaram (釈林禪寺) の名が知られ、また Bogor には Maha Cetiya Dhanaguna (茂物福德廟) がある。

Yogyakarta では、先に述べた Ibu R. S. Prawirokoesomo S. H. の邸内にある Vihara Indra Loka をあげねばならぬ。その規模はジャカルタの Cetiya Prajñadipa と大差はないが、構えがやや広いようである。母屋に向って右側に vihāra を、また母屋の背後に二棟の huts を設置している。これらの huts は比丘が巡回して来た時、滞在の便宜をはかるためのものである。現段階におけるインドネシアの寺院の在り方をよく示している。

Yogyakarta における最初の vihāra は Buddha Khirri Vihāra と言ふ、一九五八年 Tjan Tjoen Gie 氏宅に設けられた。vihāra の部屋は邸内奥まったところにあり、かくれた信仰団体としてひそひそと始められた模様がしのばれるような感銘を与える。当時集まったのは二〇数名で、やがて狭くなった Kalangsati 村に移り、Vihara Buddhis Kalangsati が設立された。今でもここには毎週水曜午後二〇〇名ほど集まるが、町から少し遠くて不便なため、現在の Vihara Indra Loka が出来たという。夫人の傘下に入る地域の vihāra または cetiya の数は凡そ六〇を数えると言われる。例えば、Muntian の Vihara Triratna では、毎週火曜午後六時から八時まで、凡そ四一五〇名の会員が集まる。また夫人の傘下

には、Borobudur の近くにある Chandi Mendut の横に新しい土地を入手して、vihāra や保育など福祉施設をもつ学校を建設したいと資金を集めているグループがある。

Medan は Sumatra 北部の中心であり、また Sumatra 随一の都会であるが、ここには三〇ほどの仏教寺院があるという。Vihara Borobudur は、筆者がインドネシアで見た Theravāda 式寺院の中では、最大のものであった。個人の家に附属せず、独立の寺院の体裁をもっていた。これを支持する団体も、他の組織に属せず、単一の教団を形成しているという。ただ一九六九年タイ比丘によって受戒した比丘の一人 Jinadhamma 師がここに滞在していたから、単立と言っても、インドネシア比丘僧伽と無関係であるのではない。vihāra 維持のためには委員会 (Yayasan Vihara Borobudur) が出来ていて、その委員長 (President) は Phoa Krishnaputra (華人) であるという。Medan の寺院はすべて華人系であるが、インド系の人で立てている寺が、一か所だけある。Asoka Vihara と言われるが、筆者は探してあることができなかった。

中国式寺院について一言すれば、ジャカルタの Ji, Lautze (老子通り) には、中国式寺院が二カ寺ある。完規寺と金徳院である。いま一カ寺慈雲菴の建設中という。菴と言えば、尼僧のための尼寺を指すことになっている。

完規寺は、ジャカルタ最古の中国式寺院である。やはり僧

侶不足で、平素は管理人がいるだけである。聞けば、管理人でも精進を守り、独身たることを誇りとし、養子を迎えて、親子三代の勤めをしているという。門を入ると、本堂正面には「WIHARA, BUDDHAYANA」としてあり、その裏に当る本堂内部に「完規寺」の額がかかっている。ここでも僧侶の来往を依頼するときは、インドネシア比丘僧伽を招請することになるようである。本堂は観音像を中心とし、多数の諸尊を配置する中国式仏壇の造りである。右手奥には別の部屋があつて、ヒンドゥーの石神像を何体もお祀りし、ここにも参詣者がある。仏教とヒンドゥー教の混淆である。本堂の正面奥には信者の集会もしくは葬式などに使われるかと思われる会堂がある。その二階には、婦人会や日曜学校のための大広間が用意されていた。完規寺の裏手に、道路を距てて金徳院がある。広東梅県出身者によって、維持されているという。

中国式寺院と Theravāda 式 vihāra など、ceṭiya との違いを本尊について言えば、中国式では中心に観音像を置くことが多いのに対し、Theravāda 式では釈尊像（主に座像）を置くことであろう。しかし Theravāda 式の場合にも、その脇にはやはり中国式寺院に見られる諸尊を併せて奉祀している。Theravāda 式寺院でも集まる人の多くは華人であり、従来の立場をそれなりに保持しているのである。従つて、インドネシアの仏教は、Theravāda と Mahāyāna との融和統一

を目ざしている。かれらはインドネシアの仏教は「Mahāyāna」でも Hinayāna でも「また Vajrayāna でもなく、'Buddhayaana」であると称している。完規寺に見られるが如くである。新しいインドネシア式の総合仏教を目ざしているのである。

五、結び

以上、要約すれば次の如く言いうるであろう。

(1) インドネシアの最近の仏教は、イスラムの強い制約下に置かれてはいるが、それなりに存在位置を与えられ、また仏教徒は次第に組織化する気運にある。

(2) 従来の華人社会においては、中国系比丘僧伽に代つて Theravāda の比丘を受け容れ、インドネシア比丘僧伽が成立して、その発展が期待せられる。

(3) 各地の有力者の邸内などに、素朴な形の vihāra や ceṭiya が造られて、信仰が着実に浸透する様相を示している。

(4) 仏教は華人以外にもジャワ人その他インドネシア人の間に受容されつつある。華人を必ずしも快く思わない人の間にも、中国仏教と違つて Theravāda ならば受け容れ易いものがある。

(5) インドネシアの仏教は、独自の総合仏教を形成する方向を示している。

インドネシアでは、「多様性の統一」(Bhinneka Tunggal Ika)

をもつて国是としている。大小無数の島々に、多数の民族と多数の言語・文化を包含するインドネシアにおいて、いわゆる「統一」の概念は、日本のような単一民族国家における場合とは決して同じではない。そこには日本におけるとは異なる価値意識が働いている。日本の仏教は、鎌倉以後伝統的に「選択」の論理を尊重してきた。しかし一般に南方仏教には南方独自の価値基準があるのであつて、日本仏教の価値判断でこれを評価することは、当を得ていない。インドネシアの仏教は、むしろ新たな「総合」の立場に立とうとしていると言ひうる。

- 1 cf. C. Hooykaas: *Balinese buddha brahmans*. North-Holland Publishing Company 1973 p. 11f. etc.
- 2 Sang Hyang Adi Buddha といふのは理論的説明は、なほ今後の課題のようである。しかし仏教徒の集会におこつては、すでにこの仏に対する帰依の表明が行なわれている。例えば、各種の儀式執行の仕方を規定する PANCARAN BAHAGIA. Jakarta 1974, p. 18 では三帰依等すといふに先がけつて 'Namo Sang Hyang Adi Buddhaya' と三回へら返つて唱和するのを定めらるゝ。
- 3 cf. The History and the role of the Department of Religious Affairs of the Republic of Indonesia, published by the Public Relations. 1975.
- 4 増田与教授『インドネシア現代史』第六章参照。

インドネシアにおける最近の仏教(前田)

- 5 Bhikkhu Khantipalo: *A Record of Journeys in Indonesia*. Bangkok 1970 (B. E. 2514), p. 9.
- 6 *ibid.*, p. 3.
- 7 *ibid.* p. 76.
- 8 事実このとき上座の僧伽が存在しなかつたか、筆者にはいふまで明確な点が残つてゐる。Pandita Vidyadharma: *Dhammasari*. P. U. U. I.—Djakarta/Bogor 1966. は序文を書いた A. Jinarakkhita 長きな 'Sangha Sufi Indonesia' の名におこつて、Maha Niyaka Shavira の資格で署名してゐるからである。
- 9 筆者は一六名の比丘名を確認した。華人出身者が多いが、しかしジャワ人・バリ人・パダン人・メナド人など華人以外の人たは少なくない。日本人比丘もゐるといふ。
- 10 *pandita* の数は一〇名を言ふべきが、*bala anupandita*, *anupandita*, *pandita* と *mahapandita* の四段階に分れる。
- 11 儀式執行の際の諸作法や日常読誦の經典といふのは 'Pantjaran TRI RATNA, by PERBUDDHI. Djawa Tengah 1970; PANCARAN BAHAGIA. Jakarta 1974, がある。紙数がなほなほ別の機会を紹介した。
- 12 PANCARAN BAHAGIA. Jakarta 1974, p. 1f.
- 13 Bhikkhu Khantipalo: *A Record of Journeys*. p. 134.
- 14 *cf. ibid.*, p. 10.
- 15 *ibid.* p. 5.

〔昭和四九年度文部省科学研究費(海外学術調査)による研究の一部〕